HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の第3人称所属語尾niの「対比」について ： 日本語の「は」との対照を通して
Author(s)	那日蘇
Citation	北方言語研究, 11, 267-286
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97229
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80934
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_04_267_Narisu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 11: 267-286（日本北方言語学会 2021）

［資料・研究ノート］

モンゴル語の第 3 人称所属語尾 ni の「対比」について
―日本語の「は」との対照を通して―

那日蘇
（千葉大学人文公共学府博士後期課程）

キーワード：モンゴル語、日本語、対比専用、対比兼用、構文パターン

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

日本語のとりたて助詞とされる「は」は、「主題」[1]を表す以外に「対比」も表すとされる（日本語記述文法研究会編2009）。モンゴル語[2]の場合、「主題」を表す形式として、bol と ni[3] があると指摘されているが（賽希雅拉図 2014、ナラントヤ 2006）、両者には「対比」を表す用法もあると述べられている（賽希雅拉図 2014、橋本 2006）。bol の「対比」の用法については、すでに賽希雅拉図 (2014) が詳しく論じている。一方、ni については、橋本 (2006) で「対比」の用法があることが指摘されてはいるものの、その詳細については論じられていない。

本稿では、以上のことを踏まえ、モンゴル語の第 3 人称所属語尾 ni の「対比」用法と、日本語のとりたて助詞「は」の「対比」用法との比較・対照を行い、それらの類似点と相違点を明らかにする。さらに、その比較・対照を通して、モンゴル語の第 3 人称所属語尾 ni の「対比」の特徴を明らかにする。

0.2. 本稿の構成

第 1 節では、ni と「は」の先行研究を概観する。第 2 節では、第 1 節でまとめた先行研究についての問題提起を行った上で、本稿の立場を明らかにする。第 3 節では研究方法、第 4 節では ni の実例考察、第 5 節では ni と「は」の「対比」についての対照分析をし、第 6 節ではその結果をまとめる。

---

[1] 後の論述との関係上、ある名詞句が「主題」として認定されるための要件をここで示しておきたい。X を名詞句とし「X-P」という構造の文があった場合、本稿では、①X と P の間に「説明対象-説明内容」という関係があること、② X が表現伝達上の前提部分である（文頭に位置し、情報構造上既知である）こと、③X の指示対象が定まっていて特定できる名詞であること、の 3 点をその名詞句が「主題」であることの要件とする（尾上 2014、久野 1973、日本語記述文法研究会編 2009、堀川 2012）。筆者の観察によれば、モンゴル語の第 3 人称所属語尾 ni によって標示される名詞句にもこの要件を満たすものがある。よって、本稿では ni にも「主題」の機能があると考える。

[2] 本稿が対象とするモンゴル語は内モンゴルのチャハル方言である。ただし、本稿で扱う第 3 人称所属語尾 ni の用法に関して方言差はそれほど大きくないと考えられるため、ハルハ方言に関する先行研究も参照する。

[3] これまでの研究では ni について、「人称再帰辞」（橋本 2010: 31）、「人称所有語尾」（塩谷・中嶋 2011: 109）、「人称所有小詞」（山越 2012: 201）などの呼び方がある。本稿では、フフバートル (1993: 105) の「第三人称所属語尾」という名称を採用する。

1. 先行研究

本節では、これまでモンゴル語の ni の「対比」用法、日本語の「は」の「対比」用法について、どのように論じられてきたのか、先行研究を紹介する。

1.1. モンゴル語の ni の「対比」用法について

橋本 (2006) は、ni の機能には「トピック標示」と「焦点標示」があると述べている。ただし、次の (1) のような場合、ni は「対比」を表すという面が強いと述べている。

(1) Ene n' tsagaan budaa, ter n' elsen čixer. [4]
これ:ø 3P 米:ø それ:ø 3P グラニュー糖:ø
「これはお米、それはグラニュー糖です。」

（橋本 2006: 13）

(1) は、客が店員に「この灰色の紙に包んであるものは何ですか」という質問をしたときの返答の文である。このような ni について、橋本は「むしろ、「これ」で指すものと「それ」で指すものを取り立てて対比させる機能の方に ni の重心がかかっているのである」（橋本 2006: 13）と述べている。ただし、ni の「対比」用法の詳細については特に述べていない。

管見の限り、モンゴル語の ni の「対比」用法について言及している研究は少なく、また、「対比」という概念を明確に定義しているものも見当たらない[5]。

1.2. 日本語の「は」の「対比」用法について

1.1 で述べたモンゴル語の先行研究とは対照的に、日本語の場合、「は」の「対比」についての研究はすでに早い時期からなされている。以下、日本語における「対比」の「は」の定義とその分類について、どのように記述しているのかを紹介する。

1.2.1. 「対比」の「は」とは？

「対比」の「は」の定義について、意味・形式の面から詳細に記述している研究としては、野田 (1996) と丹羽 (2014) がある。以下、それらについて紹介する。

1.2.1.1. 野田（1996）の記述

野田 (1996) では「は」を「主題」を表す助詞と見なした上で、ある場合の「は」では「主題」を表す働きが薄れ、対比的な意味を強く感じさせることがあると述べている。そのよう

[4] 本稿で扱うモンゴル語の表記はモンゴル文字の綴りに従いローマ字に転写したものである。転写方法はフフバートル (1993) に従うが、q と k の表記を x に、G と g の表記を g に統一する。ただし、例 (1) の表記はそのまま引用したものである (n'=ni) 。また、モンゴル文字の語末の分ち書き母音の境界をアンダーバー "_" で表記し、接辞境界をハイフン "-" で表記する。モンゴル語の用例と中国語で書かれた文献の日本語訳は筆者によるものである。

[5] 賽希雅拉図 (2014) では bol の「対比」の用法について述べられているが、モンゴル語における「対比」の定義については言及されていない。

な「対比」について、「対比的な意味というのは、ほかのものと比べて、「ほかのものはそうではないが、これはこうだ」というような意味である。」（野田 1996: 7）と定義している。また、対比的な意味が感じられる文は、典型的に次のような形になっているという。

(2) ……A は X けれど、B は Y。

（野田 1996: 7）

(2) の A と B は同じカテゴリーに属していてセットとして考えやすいもの、X と Y は反対の動作や状態を表すものであるという[6]。また、「A は X」と「B は Y」が逆接の「けれど」や「が」でつながれていると述べている。しかし、実際の例を観察すると、「A は X」と「B は Y」が「が」や「けれど」で接続されない場合もある（第 2 節を参照）。野田 (1996) では、このような構文について特に触れられておらず、典型的な構文のみを取り上げて記述している。なお、野田のいう「X と Y は反対の動作や状態を表す」という際の「反対の動作や状態」には、その述語が「好き」と「好きではない」のように肯定と否定で形態的に対立する場合や、「好き」と「嫌い」のように語彙的に対立する場合（対義語の場合）だけでなく、以下の (3) のような「「東京の秋葉原の五分の一程度の額に過ぎない」と「日本一である」のように対立する概念」（野田 1996: 205）である場合も含まれている。

(3) 大阪・日本橋の電気街は、家電製品の売り上額では、東京の秋葉原の五分の一程度の額に過ぎないが、パソコンの売上額は日本一である。

（野田 1996: 205）

1.2.1.2. 丹羽（2014）の記述

丹羽（2014: 491）は「対比」を「対比関係は「X は P，X′は¬ P」と表示できるような関係、つまり、X・X′に対して、P の肯定を割り当てるか否定を割り当てるかという対立である」と定義している。具体的には、次のような例を挙げている。

(4) きのうは来たけど、あしたは来ない。
(5) 山田は銀行員、田中は公務員だ。
(6) 空気は汚いが、花は咲く。

（丹羽 2014: 491）

(4) の対比関係は、「きのう」に「来る」の肯定を、「あした」に「来る」の否定を割り当てて成立していると述べている。また、(5) の「銀行員」と「公務員」のように肯定と否定の形を取っていない場合でも、「山田は銀行員→公務員ではない」と「田中は公務員だ」という肯定と否定の関係を推論できると指摘している。さらに、(6) の場合は、「空気が汚

[6] 後述するように、野田は X と Y が反対の動作や状態を表さなくても「は」が対比を表す場合（「並立的な対比」と呼ばれる）があるとするが、野田 (1996) が「対比」の典型としているのは、(2) のような場合である。

い」ことから「花が咲かない」ということが予想され、それが現実の「花は咲く」と対立しているという。

実際、丹羽 (2004) で取り上げられている例の (4) は、野田 (1996) の言う対立的な対比の構文、(5) は並列的な対比の構文、(6) は (3) に類似した構文であると考えられる。これらの例は、野田 (1996) の言う「対比」の用法に合致している。しかし、野田 (1996: 7) は「対比」の「は」について「（略）「ほかのものはそうではないが、これはこうだ」（略）」だという曖昧な表現を用いて定義している。それに対して、丹羽 (2014: 491) は「対比関係は「X は P，X′は¬P」と表示できるような関係、つまり、X・X′に対して、P の肯定を割り当てるか否定を割り当てるかという対立である」と述べ、野田 (1996) の定義を形式的により明確にしている。したがって、本稿では、丹羽 (2014) の定義を参考にする。

1.2.2. 対比の「は」の分類

次に、対比の「は」の分類について見る。対比の「は」を明確に分類したのは野田 (1996) である。一方、佐藤 (1976) では、「は」が主題と対比を同時に表すと述べられているものの、野田 (1996) のような明確な分類は行なわれていない。尾上 (1981) は、「は」が「対比」を表す場合の条件を中心に記述しており、対比の「は」の分類を主目的としたものではない。青木 (1992) は、述語成分において「は」が「二分結合」に働いていることを中心に記述しているもので、尾上と同様、対比の「は」の分類を目的としてはいない。なお、尾上 (1981) と青木 (1992) は、対比の典型と見なすことのできる対比の明示的な用法よりも、対比の相手が明示されていないタイプを中心に扱っている[7]。

それに対して、野田 (1996) は、対比の典型でありながら、これまでの研究であまり詳しく扱われてこなかった「明示的な対比」（1.2.2.2 を参照）について明確な分析を行ない、その分類を試みている。野田 (1996) は対比を「明示的な対比」と「暗示的な対比」に分類し、さらに「明示的な対比」を「対比専用」の「は」と「対比兼用」の「は」に分類する。さらに、対比専用[8]の「は」を中心に構文的観点から分類を行い、「対立的な対比」と「並立的な対比」という 2 種類の構文があると指摘している[9]。このように野田 (1996) は「対比」の「は」を様々な観点から詳細に分類している。よって、本稿は野田 (1996) の分類に従って分析を行うこととするが、以下ではまず、野田 (1996) が言う「暗示的な対比」と「明示的な対比」について概観しておく。

1.2.2.1. 暗示的な対比

暗示的な対比というのは対比の相手が明示されないことを言う。たとえば、「子供たちは食器は持ってきた」（野田 1996: 200）のような場合、例えば、「なべは持ってこなかった」

[7] 「猫は耳は鋭い。」（尾上 1981: 104）や「楽しくはある。」（青木 1992: 267）などのような用例を中心に扱っている。

[8] 野田 (1996) は、対比専用を対比の「は」の典型であると考えているため、対比専用を中心に記述している。「対比兼用の「は」が結果的に対比の意味が感じられるだけのもので、典型的な対比とはいえない。」（野田 1996:201）と述べている。

[9] 青木 (1992: 147) は、野田 (1996: 201) の言う「対立的な対比」と「並立的な対比」をそれぞれ「逆接対比」と「並立対比」として捉えている。

ことが暗示されているのだという。

1.2.2.2. 明示的な対比

野田 (1996) によれば、明示的な対比とは対比の相手が明示されることである。次の (7) では「…カレー…」と「…ご飯…」のように、対比の相手が明示されている。

(7) 子供たちはカレーは作っているが、ご飯は炊いていない。

（野田 1996: 200）

野田 (1996) は、この明示的な対比をさらに次のように対比専用の「は」と対比兼用の「は」に分類している。

① 対比専用の「は」と対比兼用の「は」

対比専用とは、「は」が対比を表すだけで主題を表す働きをしないものである。一方、対比兼用とは「は」が主題を表すと同時に、対比の意味も持っているものである（野田 1996）。次の (8) は対比専用の「は」、(9) は対比兼用の「は」の例である。

(8) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。
(9) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。

（野田 1996: 200）

(8) では「肉は」「魚は」に対比の意味がなければ、「肉が」「魚が」になる。つまり、「肉は」「魚は」の「は」は対比を表すだけで、主題を表す働きはしていない。主題を表しているのは「私は」の「は」である。これに対して、(9) の「兄は」「弟は」は対比の意味がなくても、「兄は」「弟は」になる。そこで、「兄は」「弟は」の「は」は主題を表しているといえる。ただし、逆接接続助詞「が」を使った対比の構文の中にあるため、結果的に対比の意味を感じさせるという（野田 1996）。

野田 (1996) は、さらに、このうち対比専用の「は」を、次のように対比的な対比と並立的な対比の構文に分類している。

② 対立的な対比と並立的な対比

野田 (1996) の言う対立的な対比か並立的な対比かを判断する基準には、主に次の 2 点があると考えられる。1 つ目は、対比される 2 つの部分が逆接の接続助詞（「が」や「けれど」など）でつながれているのか、並立の接続助詞（「て」や「し」など）でつながれているのかという点である。2 つ目は、述語が肯定と否定で対立しているのか（「好き」と「嫌い」のような対立する概念の場合も含む）、同じかあるいは類似した語であるのかという点である。

(10) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。

(11) 私は肉はスーパーで買い、魚は市場で買う。

（野田 1996: 200, 202）

(10) では対比される 2 つの部分が逆接の接続助詞「が」でつながれており、述語は「好き」と「好きではない」で対立している。このような場合を野田 (1996) では対立的な対比とみなす。これに対して、(11) では対比される 2 つの部分は動詞の連用形でつながれており、述語には「買う」という同じ動詞が用いられている。このような場合を野田 (1996) では並立的な対比とみなす。

2. 問題提起および本稿の立場

野田 (1996) は、上述のように、明示的な対比を対立的な対比と並列的な対比の 2 種類の構文に分類しているが、次に取り上げる (12) (13)[10] のような周辺的な構文については論じていない。(12) (13) では述語が「厳しさ」と「優しさ」、「活用する」と「活用しない」で対立している。ただし、対比される 2 つの部分をつなぐのに、逆接の接続助詞は用いられていない。

(12) しかし私の経験では、プロテスタントの場合には別種の「**厳しさ**」があり、カトリックの場合には、また別種の「**優しさ**」があるように思われます。
（ホセ・ヨンパルト 1986『カトリックとプロテスタント: どのように違うか』中央出版社）

(13) 用言（動詞・形容詞・形容動詞）と助動詞は**活用し**、それ以外の品詞は**活用しない**。
（宮地裕他 2005『国語 2』光村図書出版）

一方、逆接の「が」を用いているが、述語で「好きだ」という同じ形容動詞を使っている (14) のような例も考えられる。

(14) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。（＝例 (9) ）

(12) (13) (14) のような例は対立的な対比なのか、並立的な対比なのかを明確に分類することは難しいと考えられる。

そこで、本稿では、まず野田 (1996) の分類に従い、対比の「は」を対比専用と対比兼用に分ける。また、上で示したような周辺的な用例もあることを踏まえ、対比専用と対比兼用の「は」を、対比される 2 つの部分の述語（または節）の部分と接続助詞（または接続詞）の特徴によって以下の 4 つの構文パターンに分類する。以下では、それぞれのパターンの特徴についても述べる。なお、4 つの構文パターンのすべてにおいて、「A と A´は同じカテゴリーに属していてセットとして考えやすい」ということが前提となる。

[10] 以下で挙げる日本語の用例はすべて「現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言」による。

【パターン 1】:［A は X $_{逆接}$[11]、A´ は Y］

(a) 「A は X」と「A´ は Y」は逆接の接続助詞（e.g.「が」「けれど」）や接続詞（e.g.「しかし」）でつながれる

(b) X と Y は反対の動作や状態を表す

(b-1) 対義語（e.g.「好き」と「嫌い」）

(b-2) 肯定と否定で対立する語（e.g.「好き」と「好きではない」）

(b-3) 概念で対立する節（e.g. (3) のような場合）

【パターン 2】:［A は X $_{並列}$[12]、A´ は Y］

(a) 「A は X」と「A´ は Y」は並列の接続助詞あるいは動詞・形容詞・形容動詞の連用形でつながれる

(b) X と Y は反対の動作や状態を表す

(b-1) 対義語

(b-2) 肯定と否定で対立する語

(b-3) 概念で対立する節

【パターン 3】:［A は X $_{逆接}$、A´ は X´］

(a) 「A は X」と「A´ は X´」は逆接の接続助詞や接続詞でつながれる

(b) X と X´は同じか意味的に類似した述語（e.g. X, X´とも「買う」、「23 歳」と「26 歳」）

【パターン 4】:［A は X $_{並列}$、A´ は X´］

(a) 「A は X」と「A´ は X´」が並列の接続助詞あるいは動詞・形容詞・形容動詞の連用形でつながれる

(b) X と X´は同じか意味的に類似した述語

3. 本稿の研究方法

本稿の目的は、日本語の「は」の対比と比較・対照することにより、ni の対比の特徴を明らかにすることである。そこで、ni と「は」の実例をコーパス等から収集し、第 2 節で示した対比の「は」の 4 つの構文パターンに則した分類を行い、用例数を集計する。その後、対照言語学的観点から両言語の類似点と相違点を明らかにする。具体的には、① ni と「は」では、対比専用と対比兼用のどちらの場合が多いのか、② 4 つの構文パターンのうち、どの構文パターンに ni と「は」が現れやすいのか、③ ni と「は」が現れる構文にはどのような特徴（以降、「構文特徴」と呼ぶ）があるのか、また、それらの構文特徴は日本語とモンゴル語で類似しているのか異なっているのかという点を検討していく。

[11] 日本語のパターン 1 とパターン 3 は逆接の接続助詞（接続詞）を用いる。以下では「逆接」として示す。なお、「A は X。$_{逆接}$A´は Y」という形の構文もある。

[12] 日本語のパターン 2 とパターン 4 は並列の接続助詞（接続詞）を用いる。以下では、「並列」として示す。

モンゴル語の ni の対比の実例は、モンゴル語の教科書 9 冊と 2 つの文学作品から収集する[13]。日本語の対比の「は」については、これまでの研究成果を参照しながら、「現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言」を利用して実例を収集する。

4. 考察

4.1. ni の実例分析

ni の明示的な対比の例は 358 例収集できた。以下では、ni を対比専用と対比兼用に分け、さらに構文の面から 4 つのパターンに分類する。

4.1.1. 対比専用の ni

対比専用の ni は 157 例あった。その中には、一文に主題を表す形式と対比の ni が同時に現れる場合と、同時には現れない場合があった。両者の用例数を比べると、一文に主題を表す形式と対比の ni が同時に現れない例が 154 例と圧倒的に多いのに対し、主題を表す形式と対比の ni が同時に現れる例は 3 例しかなかった。

以下では、まず主題を表す形式と対比の ni が同時に現れた例を取り上げる。主題を表す形式として使われたのは gedeg ni[14] であり、用例数は 2 例である。

(15) magula-gad magta-xu **gedeg ni** xümün xereg učir-yi
悪口を言う-CV ほめる-VN TOP 人間 物 事-ACC
magta-n saisiya-xu atal_a-ban sain-ača ***ni*** exile-xü
ほめる-CV 賞賛する-VN のに-REFL 良い-ABL NI 始まる-VN
ügei, magu tala-ača ***ni*** bir dürü-xü nige jüil-ün arg_a
ない 悪い方面-ABL NI 着手する-VN 一 種-GEN 作戦
bolu-n_a.
MP-NP
「悪口を言ってからほめるというのは、人間が物事を称賛するのに、良い面からは始めずに、悪い面から着手するという一種の作戦である。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (1) 2009: 160)

---

[13] 詳しくは参考文献の「資料出典」を参照。これらの資料を利用したのは、これらが標準的な書き言葉であると考えられるためである。内モンゴルでは上述の教科書をもとに教育がなされているが、これらはチャハル方言を基礎方言とした標準的な書き言葉で書かれている。さらに、教科書だけでは用例が少ないため、《Monggol-un silideg ügülelge nugud》という短編小説選を選んだ。これも教科書と同じく標準的な書き言葉として扱うことができると思われる。さらに、教科書のような文型の比較的限られたものだけでなく、より多くの人が実際に用いている用例を収集するため、読者が多く影響力のある小説《Tungalag tamir》からも用例を収集した。なお、教科書の Alban jirum-un surgan xümüǰil-ün《xele bičig》の 7 年級（下）と 8 年級（下）は手に入らなかったため、その 2 冊からの用例の収集はできていない。

[14] 賽希雅拉図 (2014) では非典型的な主題マーカーとして gedeg bol（より書き言葉的）を取り上げている。gedeg bol は日本語の「というのは」「とは」の意味・用法に近い。そして、gedeg bol の類には gedeg ni という形があると述べている。本稿では gedeg ni を、主題を表す形式として扱う。

また、次の (16) のように činiˈ[15] が用いられている例もあった。

(16) ene **čini ,** nagadu tal_a ***ni*** biden-ü amidural yum,
これ TOP この面 NI IST.PL-GEN 生活 MP
čagatu tal_a ***ni*** ulus-un xöröngge yum.
その面 NI 国-GEN 財産 MP
「これはこの面は私たちの生活だ、その面は国の財産だ。」
(D. Načugdorǰi & Č. Demdinsürüng 1981: 47)

(15) では、magula-gad magta-xu「悪口を言ってからほめる」が gedeg ni によって提示され、主題の要件を満たす。一方、sain-ača「良い面から」と magu tala-ača「悪い面から」には ni が付き、「良い面からは始めずに、悪い面から着手するという一種の作戦になる」のように対比させている。したがって、この ni は対比の意味を持っていると考えられる。

(16) では、čini によって提示された ene「これ」が主題の要件を満たしている。nagadu tal_a「この面」と čagatu tal_a「その面」にはそれぞれ ni が付き、「この面は私たちの生活だ」と「その面は国の財産だ」を対比させている。したがって、nagadu tal_a ni「この面は」と čagatu tal_a ni「その面は」の ni は対比を表していると考えられる。

次に、対比の ni が主題を表す形式と同時に現れなかった例について見る。

(17) ergi-ǰü xara-bal xoyar xeüxe-d xötölö-gsen dulm_a
振り返る-CV 見る-CON 二人 子供-PL 引く-VN ドルマ
üsü ***ni*** segsei-n nidü ***ni*** bölčöi-n
髪の毛 NI ボサボサだ-CV 目 NI 膨れる-CV
uxilag-sagar daga-ǰu ire-be.
泣く-CV ～についていく-CV 来る-PAST
「振り返って見たら、二人の子供を引いたドルマが、髪の毛を振り乱し、目を腫らして、泣きながらついて来た。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (5) 2009: 96)

(17) では、dulm_a「ドルマ」が動作の主体であり、この文の主語だと考えられる。そして、dulm_a「ドルマ」は φ によって提示されている。つまり、(16) と違って、後ろには主題を表す形式は現れていない。ここでは、üsü「髪の毛」と nidü「目」にぞれぞれ ni が付き、ドルマの髪の毛がボサボサな様子と目が腫れた様子と対比させている。この ni には主題を表す意味はない。したがって、(17) は対比専用の例と考えられる。

[15] ナラントヤ (2008) では、第 2 人称所属語尾の čini を取り立ての観点から論じている。本来 2 人称代名詞と共起することができないはずのところ、1 人称代名詞と 3 人称代名詞と同じ程度で 2 人称代名詞の後ろにも用いられていると記述している。その理由について、ナラントヤ (2008) は、čini の人称所有を表す機能が弱まり、一種の取り立て小辞としての機能が強くなっているからだとしている。その意味では本稿で取り上げた čini もすでに主題の意味を持っているのではないのかと判断した。

4.1.2. 対比兼用の ni

対比兼用の ni は全部で 201 例あった。その中には、対比される 2 つの部分の片方で対比の ni が省略されない場合と省略される場合があった。前者の例は 5 例、後者の例は 199 例であった。(18) は対比の ni が省略されていない例、(19) と (20) は省略されている例である。

(18) silüg-ün　mön činar　***ni***　tegün-ü　uyanggalal-du　bayi-dag
詩-GEN　本質　NI　その-GEN　叙情-DAT　ある-VN
uyanggalal-un　ami gool　***ni***　sedxilge-dü　orosi-n_a.
叙情-GEN　生命　NI　感情-DAT　存在する-NP
「詩の本質はその叙情にあり、叙情の命は感情にある。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (5) 2009: 89)

(18) では silüg-ün mön činar「詩の本質」と uyanggalal-un ami gool「叙情の命」にぞれぞれ ni が付き、「叙情にある」ことと「感情にある」ことを対比させている。また、ni は主題の要件も満たしている。したがって、(18) の ni は主題かつ対比の意味を持ち、対比兼用の用法だと言える。

(19) guw_a saixan　***ni***　xödelmüri-yi　bütüge-gsen　bisi,　xarin
美しい　NI　労働-ACC　創造する-VN　ない　しかし
xödelmüri　guw_a saixan-yi　bütüge-gsen　yum.
労働　美しい-ACC　創造する-VN　MP
「美しさが労働を創造したのではなく、労働が美しさを創造したのだ。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (5) 2009: 102)

(20) ǰarim　xümün　gün　yexe　sanag_a　alda-ǰu,　ǰarim　***ni***
ある　人　深い　大きい　ため息　つく-CV　ある　NI
üge　dagu　ügei　xömösxe　ǰanggidu-n　ǰogso-n_a.
話　声　ない　眉　ひそめる-CV　立つ-NP
「ある人は大きなため息をつき、ある人は黙って、眉をひそめて立っている。」
(D. Načugdorǰi & Č. Demdinsürüng 1981: 295)

(19) では「美しさが労働を創造したのではない」ということと「労働が美しさを創造した」ということを対比させており、述語が bütüge-gsen bisi「創造したのではなく」と bütüge-gsen「創造した」のように否定と肯定で対立している。ただし、対比されている 2 つの部分の、前の部分 guw_a saixan「美しさ」には ni が付いているが、後の部分 xödelmüri「労働」には付いていない。(19) の ~bisi, xarin~ という形式から、「美しさ」より「労働」のほうに重点が置かれていることと、xödelmüri「労働」に ni が付加されていないことはなんらかの相関性があるのではないかと推測できる。

(20) では「ある人は大きいため息をつく」ということと「ある人は黙って、眉をひそめて立っている」ということを対比させている。しかし、対比されている 2 つの部分の、後の部分 ǰarim「ある人」には ni が付いているが、前の部分 ǰarim xümün「ある人」には付いていない。つまり、前の部分 ǰarim xümün は属部と主要部名詞から成っているが、後の部分 ǰarim では主要部名詞 xümün が省略され、直後に ni が来ている。このことから、ni が現れるか否かは ǰarim の後ろの名詞が省略されているかどうかに関係があるのではないのかと推測できる。しかし、現段階では確かなことは言えない。今後、(19) と (20) のような例を増やし、更なる考察が必要である。

4.1.3. 対比の ni の構文パターン

4.1.1 と 4.1.2 では、対比の ni を対比専用と対比兼用に分類して考察した。本節においては、それらの ni の例をさらに上述の 4 つの構文パターンに分け、それぞれの構文パターンにおける用例数を見てみる。

【パターン 1】:［A ni X 逆接[16]、A´ ni Y］

パターン 1 に分類できる例は全部で 18 例あった。たとえば、(21) のような例である。

(21) oi modu-n-u üngge ***ni*** neidem-dü-ben tünere-n
森林-不定の n- GEN 色 NI 広範囲-DAT-REFL 真っ暗-CV
baragala-ǰu genedte xara-bal nige bögem ǰuǰagan manan
暗くなる-CV 突然 見る-CON 一 量詞 厚い 霧
metü. uda modu-n-u goyomsog düri ***ni*** uniyar
みたい ペキン柳木-不定の n-GEN 華麗 姿 NI 煙
mana-n-u gebečü dotur_a-ača ču tani-gda-ǰu bayi-l_a.
霧-不定の n-GEN しかし 中-ABL も 認知する-PASS-CV いる-NP
「森林の色が広範囲で真っ暗になり、突然見ると厚い霧のようである。しかし、ペキン柳の麗華な姿は煙霧の中からでも認知される。」

(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (1) 2009: 115)

(21) では oi modu-n-u üngge「森林の色」と uda modu-n-u goyomsog düri「ペキン柳の麗華な姿」をそれぞれ ni を付けることにより対比させている。さらに、「森林の色」は「厚い霧のようである」、「ペキン柳の麗華な姿」は「煙霧の中からでも認知される」と、述語の部分は意味的に対立している。対比されている 2 つの部分は gebečü「しかし」という逆接の接続詞でつながれている。

[16] パターン 1 とパターン 3 の場合、逆接を表す-baču/-bečü「～したが、～したけれど」という連用形を用いた例がもっとも多かった。たとえば、gebečü, bolbaču, bayibaču, ebderbečü などが現れた。また、getele「しかし」を用いた例もあった。以下では日本語と同じ「逆接」で表す。なお、「A ni X。逆接 A´ ni Y」という形の構文もある。

【パターン 2】:［A ni X 並列/ϕ[17]、A´ni Y］

パターン 2 に分類できる例は 30 例あった。たとえば、(22) のような例である。

(22) emünexi egsig ***ni*** todu, xoinaxi egsig ***ni*** balarxai
前の 母音 NI 明瞭な 後ろの 母音 NI 不明瞭な
bayi-dag xoos egsig-yi uruguda-xu xoos egsig ge-n_e.
いる-VN 二重 母音-ACC 降下-VN 二重 母音 言う-NP
「前の母音は明瞭で、後ろの母音は曖昧な二重母音のことを下降二重母音という。」
（Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a 7 年級 (上) 2016: 102）

(22) では、emünexi egsig「前の母音」と xoinaxi egsig「後ろの母音」の後ろにそれぞれ ni が付いており、「前の母音は明瞭である」「後ろの母音は曖昧である」ということを対比させている。述語の部分は todu「明瞭である」と balarxai bayi-dag「曖昧である」であり、意味的に対立している。また、特に接続詞を用いていないことから、(22) を構文パターン 2 の例と認定することができる。

【パターン 3】:［A ni X 逆接、A´ ni X´］

パターン 3 に分類できる例は収集できなかった。ただし、モンゴル語にこの構文パターンがないというわけではない。(23) は筆者の作例によるものである。

(23) ene -yi ***ni*** nom-un sang-ača ǰegele-gsen bolbaču,
これ-ACC NI 本-GEN 館- ABL 借りる-VN が
ter -yi ***ni*** sečen-eče ǰegele-gsen yum.
それ-ACC NI スチン-ABL 借りる-VN MP
「これは図書館から借りたが、それはスチンから借りたのだ。」

(23) では、ene-yi「これを」と ter-yi「それを」にそれぞれ ni が付き、「これは図書館から借りた」ことと「それはスチンから借りた」ことを対比させている。また、bolbaču「が」という逆接の接続詞を用いている。したがって、パターン 3 のような構文はあると考えられる。

【パターン 4】:［A ni X 並列/ϕ、A´ ni X´］

パターン 4 の用例数は圧倒的に多く、全部で 310 例である。たとえば、(24) のような例である。

[17] パターン 2 とパターン 4 の場合、並列の意味を持つ副動詞語尾 -ǰu/-jü/-ču/čü、あるいは結合を表す -n を用いるものがもっとも多かった。さらに、モンゴル語の場合は必ずしも接続詞を用いるわけではなく、ゼロで現れる場合もある。したがって、以下では、接続詞を用いる場合を「並列」、特に用いていない場合を ϕ で示す。

(24) eimürxüü uyanggalal-du üǰemǰi ***ni*** ačiyalaburi bol -ǰu,
このような 叙情-DAT 風景 NI 媒体 になる-CV
sedxilge ***ni*** sünesü bol -dag.
感情 NI 霊魂 になる-VN
「このような叙情では、風景は媒体になり、感情は霊魂になる。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (2) 2009: 55)

(24) では üǰemǰi「風景」と sedxilge「感情」にそれぞれ ni が付いているが、述語は「媒体になる」「霊魂になる」と反対の動作や状態を表しているわけではない。並列を表す -ǰu という副動詞語尾が用いられている。

ちなみに、パターン 4 の構文では次の (25) のように述語が省略される場合もある。

(25) ǰarim ***ni*** dürbe-n-ü nige xubi-yin ibrei čisutai
ある人 NI 4-不定の n-GEN 1 分-GEN ユダヤ 血統
xümün-yi, ǰarim ***ni*** naima-n-u nige xubi-yin
人-ACC ある人 NI 8-不定の n-GEN 1 分-GEN
ibrei čisutai xümün-yi ibrei ündüsüten-dü togača-n_a
ユダヤ 血統 人-ACC ユダヤ 民族-DAT 見なす-NP
gexü metü-ber margu-ldu-ǰu bayi-ba.
など-INST 議論する-PV-CV いる-PAST
「ある人は 4 分の 1 のユダヤ血統の人を、ある人は 8 分の 1 のユダヤ血統の人をユダヤ民族だと見なすなどのように議論している。」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (2) 2009: 42)

(25) では、ǰarim「ある人」という同じ代名詞に ni が付き、「ある人は 4 分の 1 のユダヤ血統の人を」「ある人は 8 分の 1 のユダヤ血統の人をユダヤ民族だと見なす」と対比している。接続詞は用いられていない。ここでは、最初の「ユダヤ民族だと見なす」という述語の部分が省略されていると考えられる。これは述語が同一あるいは類似形式であるために生じる現象だと考えらえる。

4.2. まとめ

以上、本節で述べたことをまとめる。まず、対比専用の場合は、主題を表す形式と対比の ni が同時に現れる例が極めて少なかった。また、対比兼用の場合は、対比される 2 つの部分の、前部分か後部分のどちらかの ni が現れないという現象が観察された。さらに、4 つの構文パターンごとの用例数を見てみると、パターン 4 の用例数がもっとも多かった。次いで、パターン 1 とパターン 2 であり、2 つのパターンの用例数にはそれほど大きな差はない。パターン 3 に分類できる例は収集はされなかったが、(23) で見るように、このパターンに該当する例はありうると考えられる。

5. ni と「は」の対比についての対照分析

本節では、対比専用と対比兼用、および 4 つの構文パターンにおける ni と「は」について、それぞれのパターンの例全体に占める割合と構文特徴の 2 点から対照する[18]。

5.1. 用例全体に占める割合

5.1.1. 対比専用と対比兼用

対比専用と対比兼用の例全体に占める割合は表 1 の通りである（カッコ内の数字は用例数である）。

表 1. 対比専用と対比兼用における「は」と ni の出現率

	「は」	ni
対比専用	18% (40)	44% (157)
対比兼用	82% (191)	56% (201)

日本語でもモンゴル語でも対比兼用のほうが対比専用より多く用いられていることがわかる。また、対比兼用の場合は「は」の方が ni より割合が高い。すなわち、「は」が 82 %であるのに対して、ni は 56%である。一方、対比専用の場合は ni の方が「は」より割合が高い。すなわち、ni は 44%であるのに対して、「は」は 18 %に過ぎない。

野田 (1996) は、対比専用の「は」が対比の「は」の典型であり、対比兼用の「は」は本来は主題で、結果的に対比の意味が感じられるだけであるため、典型的な対比だとは言えないと論じている。表 1 から見ると、たしかに「は」は典型的な対比専用の構文でよりも，非典型的な対比兼用の構文で用いられる用例数の方がはるかに多い。それは「は」という助詞の中心的な用法が対比にあるのではなく、主題にあるからだと考えられる。これに対して、ni の場合は、対比兼用と対比専用の間にそれほど大きな差がない。ni は対比専用でも、対比兼用でも用いられ、どの用法が典型的であるかは「は」と比べると、はっきりしていない。

5.1.2. 構文パターン

4 つの構文パターンにおけるそれぞれの用例全体に占める割合は以下の通りである。

表 2. 4 つの構文パターンにおける「は」と ni の出現率

構文パターン	「は」	ni
パターン 1	42% (96)	6% (18)
パターン 2	11% (26)	8% (30)
パターン 3	-	-
パターン 4	47% (109)	86% (310)

[18] 紙幅の都合上、詳細は省略するが、日本語の対比の「は」については、合計で 231 例の用例が収集できた。

日本語の場合、パターン 1 とパターン 4 を中心に対比の「は」が多く用いられている。パターン 2 は 3 番目に多く、パターン 3 の例は収集できなかった[19]。これに対して、モンゴル語の場合には、パターン 4 が圧倒的に多く、パターン 2、パターン 1、パターン 3 の順で少ない。

以上のことを踏まえると、日本語の対比の「は」は主にパターン 1 とパターン 4 を中心に用いられているのに対して、モンゴル語の対比の ni はパターン 4 を中心に用いられていることがわかる。パターン 2 は両言語とも出現率は低い傾向にある。パターン 3 は両言語ともないわけではないが、今回の調査では実例が収集できなかったことは注目に値する。

5.2. 構文特徴

5.2.1. 対比専用

調査でも明らかになったように、日本語の対比専用の「は」は、主題の「は」と同時に現れるのが一般的である。野田 (1996) では、対比専用の典型的な構文として (26) を挙げている。

(26) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。
　　主題の「は」
　　対比専用の「は」

（野田 1996: 209）

また、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から収集した対比専用の主題の「は」が対比の「は」と共起する場合がほとんどである。

(27) ライオンや甲虫や建物たちは、なぜ子どもの本のなかでは自由に喋ることができ、大人の本のなかでは喋ることをゆるされないのか。

（長田弘 1986『読書百遍』岩波書店）

それに対して、モンゴル語の場合、主題を表す形式と対比の ni が共起する用例は非常に少なかった。上の (17) のように、日本語ならば主題の「は」が現れているところにφが現れることもある（157 例中 3 例）。

5.2.2. 対比兼用

モンゴル語の場合、4.1.2 でまとめたように、一文において対比される 2 つの部分のどちらかに ni が現れないときがある（例 (19) (20) を参照）。日本語の場合にもそれに似た現象がある。

野田 (1996: 207) によると、「（略）明示的な対比を表す文では、対比される 2 つの部分が、ほぼ対等に、たがいに対比されていた。（略）ところが、主文を述べることに重点がお

[19] ただし、モンゴル語と同様、このようなパターンは存在しないわけではない。

かれると、主文のほうでは対比の「は」が使われなくなる。」と述べている。たとえば、(28) のような場合、対比の「は」を用いても良いはずのところに、あえて「が」を用いることがあると指摘している。

(28) 実演販売のちくわがあまりにもおいしそうだったので一本買う。200 円なり。味は悪くないけど、皮がかたくて、いまひとつ。

（野田 1996: 207）

(28) では、「味は悪くない」と「皮がかたい」が対比されているため、「皮は」になってよいはずであるが、「皮は」になっていない。「「皮が」に対比の「は」が使われないのは、「味が悪くない」と「皮がかたい」を対比するより、「皮がかたくて」を「いまひとつ」の理由として述べる方が優先されるからである。」（野田 1996: 208）と述べている。モンゴル語の (19) も (28) と同じ理由で捉えられる。

野田 (1996) では言及されていなかったが、次の (29) のように、従属節でも「は」を用いて良いはずのところに、「が」を用いている例が見られた。

(29) 男性たちが居間に入り、女性は奥の部屋に入った。
（樋口健夫・樋口容視子 1986『住んでみたサウジアラビア：アラビア人との愉快なふれあい』サイマル出版会）

この場合も、「男たちが」の「が」を「は」に変えても容認度はあまり変わらないと考えられる。「が」を用いている「男性たち」の方が「女性」よりも重点が置かれているとも考えられるが、(28) と比べるとその意味合いは弱い。それは (28) では逆接の「けど」を用いているからであると考えられる。

5.2.3. 4 つの構文パターンの特徴

以下では、構文パターンごとにその構文特徴について論じる。

パターン 1 では、日本語もモンゴル語も対比兼用の割合が対比専用より高く、両言語の間に相違点はあまり見られなかった。

パターン 2 では、対比を表す ni と「は」は先行名詞に関して相違点があることがわかった。それは、次の (30) のようにモンゴル語では ni が疑問詞に付き、対比を表す用法があるのに対し、日本語ではない点である。

(30) ene　tabun xusigu　malčin-du　xen　***ni***　ǰirgalang　tai
この　5 種　牧民-DAT　だれ　NI　幸せ　ある
bui?　xen　***ni***　ǰirgalang　ügei　bui?
ですか　だれ　NI　幸せ　ない　ですか
「この 5 種家畜の牧民の誰に幸福があるのか？誰に幸福がないのか？」
(Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (5) 2009: 125)

(30) では、述語が jirgalang tai「幸福がある」と jirgalang ügei「幸福がない」のように、肯定と否定で対立している。ni は xen「誰」に付き、「誰に幸福があるのか？」と「誰に幸福がないのか？」を対比させている。接続詞は用いられていない。

これに対して、日本語ではこのような場合、「が」を用いるのが普通である。このように、モンゴル語では ni が疑問詞と共起できることは、日本語の「は」との相違点だと言える。

ni が疑問詞につく例はパターン 2 に限らず、パターン 4 でも観察された。(31) では ali「どれ」という疑問詞に ni が付き、「どれがレーニン先生」と「どれがスターリン先生」を対比させている。

(31) darag_a ni erdeni biden-dü čoxom ali ***ni*** lenin
その後 エルデニ IST.PL-DAT いったい どれ NI レーニン
bagsi, ali ***ni*** stalin bagsi gedeg-yi jiga-ju
先生 どれ NI スターリン 先生 という-ACC 教える-CV
öggü-be.
くれる-PAST
「その後、エルデニが私たちにいったいどれがレーニン先生、どれがスターリン先生かということを教えてくれた。」

(D. Načugdorji & Č. Demdinsürüng 1981: 420)

また、パターン 4 の構文では、2 つの述語が同じになることが多いため、はじめの述語が省略される場合がある。(32) では、最初の「揚州では宗叡に」の述語の部分が省略されている。既に述べたように、モンゴル語の ni にもこのような現象がある（ (25) を参照）。

(32) そのほか密教の基礎学たる悉曇（サンスクリット）に関して、揚州では宗叡に、長安では南インドの宝月三蔵にそれぞれ学ぶところがあった。
（薗田香融 1986『<宗派別>日本の仏教・人と教え』小学館）

最後にパターン 3 について見る。日本語でもモンゴル語でもこのような構文の例は収集できなかった。ただし、両言語ともこのような構文パターンがありうることは、上の (9) (23) で見た通りである。

6. おわりに

以上、本稿では、モンゴル語の第 3 人称所属語尾 ni の対比用法と特徴を、日本語のとりたて助詞「は」の対比用法と比較・対照することで、以下のような両者の類似点と相違点を明らかにした。

I. 対比専用と対比兼用における出現率

(a)「は」は対比専用としてよりも、対比兼用として主に用いられている。それは「は」の中心的な機能が対比ではなく、主題であるからだと考えられる。

(b) ni は、対比専用でも対比兼用でも出現率に大きな差はなく、どの用法が中心的なのかは「は」と比べると、はっきりしていない。

II. 対比専用と対比兼用における構文特徴

(a) 対比専用の場合

日本語は、一文に主題の「は」と対比の「は」が共起するのが一般的である。これに対して、モンゴル語の場合は主題を表す形式と対比の ni が共起することはあまり好まれない。

(b) 対比兼用の場合

日本語もモンゴル語も主文のほうに重点が置かれると、対比の「は」あるいは ni を用いても良いはずのところで、あえて「が」あるいはφが用いられることがある。また、今回の調査では、従属節のほうにも「が」あるいはφが用いられる例も見られた。しかし、なぜ、このような用いられ方がなされているのかについて、現段階では確かなことは言えない。今後の課題としたい。

III. 4 つの構文パターンそれぞれにおける出現率

対比の「は」はパターン 1 とパターン 4 を中心に用いられている。これに対して、対比の ni はパターン 4 を中心に用いられている。パターン 3 の例は収集できなかったが、存在しないわけではない。

IV. 4 つの構文パターンにおける構文特徴

パターン 1 では、両言語とも相違点はなかった。パターン 2 とパターン 4 では、対比の ni は疑問詞と共起できる。一方、「は」は疑問詞と共起しにくく、むしろ「が」が共起できる。パターン 4 では、日本語でもモンゴル語でも述語が同一か類似の形式を持ちやすいため、最初の述語が省略されやすい。

本稿では、対比の相手が明示されている例のみを中心に考察し、対比の相手が明示されていない暗示的な対比については検討できなかった。今後、暗示的な対比の例についても収集を行い、対比の「は」と ni の比較・対照をさらに進めていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、貴重なご助言・コメントをくださった 2 名の匿名査読者の先生方に深く感謝を申し上げます。また、本稿を執筆するにあたっては、大阪大学名誉教授の角道正佳先生と関西大学の松岡雄太先生からも貴重なコメントをいただきました。この場を借りて、深く感謝の意を表します。なお、本稿における不備はすべて筆者に帰するものであることを付言します。

略号一覧

_ 語末分かち書き母音/- 接辞境界/ABL 奪格/ACC 対格/CAUS 使役/CON 仮定/CV 副動詞語尾/COO 共同格/DAT 与位格/GEN 属格/INST 造格/IST 一人称/MP ムードの小辞/NP 非過去/PASS 受身/PAST 過去/PL 複数/PV 多数態/REFL 再帰所属/TOP トピック/VN 形動詞語尾

参考文献

青木伶子 (1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院.

尾上圭介 (2014)「ハ[1]」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店, p.487.

尾上圭介 (1981)「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58 (5), pp.102-118. 至文堂.

風間伸次郎 (2003)「アルタイ諸言語の 3 グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、および朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか―対照文法の試み」ボビン，アレキサンダ他編『日本語の系統論の現在』31, pp.249-340. 国際日本文化研究センター.

久野暲 (1973)『日本文法研究』大修館書店.

賽希雅拉図 (2014)『日本語とモンゴル語の主題マーカーの対照研究』大阪府立大学大学院博士論文.

佐藤雄一 (1991)「「は」の対比性について」『語文論叢』19, pp.65-78. 千葉大学文学部国語国文学会.

塩谷茂樹・中嶋善輝（2011）『モンゴル語』（大阪大学世界言語研究センター 世界の言語シリーズ 3）大阪大学出版会.

ナラントヤ (2006)「モンゴル語の主題小辞 “ bol ” “ni” ―日本語の助詞「は」「が」との対照を通して」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』6, pp. 23-40.

日本語記述文法研究会編 (2009)『現代日本語文法 5』くろしお出版.

丹羽哲也 (2014)「ハ[3]」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店, p.491.

野田尚史 (1996)『「は」と「が」』くろしお出版.

橋本邦彦 (2006)「モンゴル語の 3 人称後接語のトピック標示／焦点表示」『認知科学研究』4, pp. 7-23.

橋本勝 (2010)『ニューエクスプレス モンゴル語（CD 付）』白水社.

フフバートル (1993)『モンゴル語基礎文法』たおフォーラム.

堀川智也 (2012)『日本語の主題』ひつじ書房.

山越康裕 (2012)『詳しくわかるモンゴル語文法（CD 付）』白水社.

清格爾泰 (1991) ≪蒙古语语法≫ 内蒙古人民出版社.

資料出典

D. Načugdorǰi & Č. Demdinsürüng (1981) Monggol-un silideg ügülelge nugud, Öbör monggol-un sinǰilexü uxagan tegnig mergejil-ün xeblel-ün xoriy_a（1981『モンゴルの優れた短編小説選集』内蒙古科学技術出版社）

Č.Loduidamba (1999)《Tungalag tamir》Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a（1999『清きタミル』内蒙古人民出版社）

Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (2009) Eng-ün degedü ǰerge-yin dumdadu surgaguli-yin xičiyel-ün barimǰiy_a-yin tursilta-yin surxu bičig ,《xele bičig》 (1~5) ǰabal surxu, Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a（2009 普通高級中学課程標準実験教科書『語文』必修 (1～5 冊) 内蒙古教育出版社）

Öbör mongol-un surgan xümüǰil-ün xeblel-ün xoriy_a (2016) Alban ǰirum-un surgan xümüǰil-ün

《xele bičig》dolodugar on (degedü), naimadugar on（degedü), yisüdüger on (degedü), yisüdüger on (dooradu), Öbör mongol-un surgan xümüjil-ün xeblel-ün xoriy_a（2016 義務教育教科書『語文』（7 年級 (上)、8 年級 (上)、9 年級 (上、下) ）内蒙古教育出版社）
現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言
https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login?service=https%3A%2F%2Fchunagon.ninjal.ac.jp%2Fj_spring_cas_security_check%3Bjsessionid%3DC5E898D5F477F65F88BDB8FD2476032C（2020/12/15 最終閲覧）

On the Contrastive Use of the 3rd Person Possessive Particle *ni* in Mongolian: A Comparison with Japanese Contrastive *wa*

Narisu
（Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University)

The purpose of this paper is to consider the contrastive usage and characteristic of Mongolian third person possessive particle *ni* by comparing it with *wa* in Japanese, which has the contrastive usage. Following Noda (1996), we first divide the contrastive *wa* into two types, namely contrast-only type and contrast/topic amphibious type. Also, the contrastive construction is divided into four types (pattern 1-4). With these classifications, we compare Mongolian *ni* with Japanese *wa*.

Considering the number of examples, Japanese *wa* is mainly used as the contrast/topic amphibious type. This is because *wa* is mainly used as the topic marker, not the contrast marker. On the other hand, it is not clear which is the main usage of Mongolian *ni*. From the perspective of syntax, it is common for the topic *wa* and the contrast *wa* to co-occur in the case of the contrast-only type *wa*. Conversely, the concurrence is not preferred in Mongolian. Mongolian alternatively uses φ in the position where Japanese uses the topic *wa*.

A number of examples show that the contrastive *wa* is mainly used in pattern 1 and 4 and the contrastive *ni* in pattern 4. Regarding pattern 3, we could not find any examples. However, this does not mean that pattern 3 is nonexistent.

On the other hand, the syntactic distribution does not show any notable difference in pattern 1. In pattern 2 and 4, however, Mongolian *ni* can co-occur with interrogative words and have the usage of contrast while it is unlikely that Japanese *wa* co-occurs with interrogative words. Furthermore, in pattern 4 of both languages the predicates can be easily omitted since the two predicates are often the same.

（なりす　hangnarisu@yahoo.co.jp）